

《シンポジウム》

2018 年度シンポジウム司会報告

司会 鶴岡 賀雄

本年のシンポジウムでは、山口雅広「トマス・アクィナスの原罪論——彼のキリスト教的人間観の一側面」、辻内宣博「神の自由意志の絶対性——オッカムのウィリアムにおける原罪論から」、佐藤直子「ヒルデガルトの視る「原罪」」の順で提題がなされた。提題者たちは、すでに発表内容を共有しているため壇上での質疑はなく、休憩を挟んでフロアとの質疑がなされた。

山口の提題は、人祖アダムの中初の罪が「原罪」として全人類に「遺伝」してすべての人がそれを負っているという、近現代人には容易に受け入れがたい教義を、トマス・アクィナスが『神学大全』でどのように説明しているのか、その「原罪」の定義と「遺伝」ということの内実について解明したもので、原罪を欲情と同一視するアウグスティヌスの理解と、アンセルムスに由来する「原義〔墮罪以前に恩寵として与えられていた義〕の欠落」とする理解——これらについては矢内義顕の特別報告が歴史的展望のもとに解説している——とを、アクィナスがいかに両立させ、関係づけているのか、その理路が明らかにされた。つづく辻内の提題は、オッカムの諸テキストにおいて、原罪が消去されて救済がなされる道程として二つのタイプ（「ルート」）が区別されることを見出し、それぞれの「ルート」において、人間の為す（いわゆるペラギウスのな）功績の蓄積と、神の絶対的自由意志に懸かる救済の賦与がどのような論理的關係をなしているかが緻密に検討された。原罪論はつねに救済論とセットでとらえられなければならないのである。ついで佐藤は、「原罪」をめぐる昨年度来のシンポジウムの主題の一つだった女性論の視点を組み込んで、『スキヴィアス』の幻視の図版を数多く投影しながら提題を行った。ヒルデガルトは、教会内で劣位にある「女性」でありつつ「預言者」であるという希有な自己意識

を有していたが、それは、神に対しての「(心の) 貧しい者」としての自覚と、共同体の中で「貧しく(抑圧)された者」としての意識という二つの位相をもつ。この二重性が、神と人の普遍的・絶対的關係性の語りと、その関係が人の生きる共同体の中で歪んでいることの告発——辻内の指摘した二つの「ルート」と何らか呼応するものがあるかもしれない——を彼女になさしめている。この視点から佐藤は、ヒルデガルトの原罪理解の、伝統に即している部分とそこからはみ出すかに見える独自のヴィジョンを魅力的に解説してみせた。

以上、扱うテキスト・思想家の性格に応じて、それぞれのスタイルと論法でなされた三提題だったが、むしろそれゆえに、彼・彼女らが西欧キリスト教の原罪論の伝統の中でどのような位置を占め、意義を有しているかが、また各々の原罪論・救済論のはらむさまざまな方向性が、シンポジウム全体をつうじて立体的に浮き彫りにされたと思われる。

質疑においては、各提題の内容についての立ち入った質問、より広い視点からの問いがいくつも提出され、定刻を大きく越えて議論がなされたが、個々のやりとりを再録することは難しいので、以下では、質問の中から浮き上がってきて司会者の関心を引いた問題を、若干の私感をこめて記しておきたい。

聖書の物語(神話)を典拠とする原罪論の困難の一つは、アダム(とエヴァ)という「個人」の罪が、なぜ「すべての人」の墮落を結果するのか——「遺伝」という言葉で説明されるが——にあらう。この困難は、近代的個人主義にとってばかりでなく、人間をそれぞれに「かけがえのない」個として捉える人間理解がキリスト教自体のうちに根ざしているゆえに大きなものとなる。そしてこの困難は、「罪」を、さらには「悪」をどう捉えるかの問題に還流してくるはずである。いくつかの質問はこの点に関わっていた。

このとき、古代、中世の人々の「個」としての人間(「靈魂」)観、またその救済観に、自律独立した一個の意識体としての近世以降の人間理解をどこまで読み込むべきなのか、が問われてよいだろう。たとえば、個人の罪(原罪にまで及ぶ)の消去ないし赦しとしての救済と、共同体レベルでの悪の克服の問題は、中世の人々にとって、どのように関わると考えられていたのか。そもそもそのような問題意識があったのか。だがヒルデガルトは、佐藤によれば、人祖の墮罪によって、人間の自然本性のみならず、人間の身体を含む自然の秩序自体に混乱が生じたというヴィジョンも見て

いた。人間の救済，至福の獲得を妨げている悪，その起源としての原罪は，個々人の罪のレベルを大きく越えて，現代の言葉で言えば社会的レベルでの悪，構造悪のレベルまで射程に含んで考えられていたかもしれない。とすればそれは，「救済」を，個々の靈魂の問題に限定しない思惟でもあるだろう。「原罪」の脱神話化とも見られようカントの「根源悪」は，連続シンポジウムの発端になされた宮本久雄の理解では，近代個人主義的なカントの把握を越えて，世界に大きな歪みを生み続ける原理を名指す言葉として言われていたように思う。

このように視野を広げてみることで，山口の提題が強調し，辻内のそれが喚起したような，中世の哲学者・神学者の所論に対する現代人の違和感のゆえんがかえって自覚化され，また相対化されて，中世思想研究の意義と可能性が際立つことが期待される。各提題者は，そうした「現代風」の問題関心を表立って持ち込むことなく，中世の人々の思考の精確な理解に徹する提題を行ったが，それぞれの立論，行論の背景には，狭義の「キリスト教」思想，「中世」思想という限定枠を越えた哲学的問題関心が背景にあるだろうことを蛇足ながら記しておきたい。